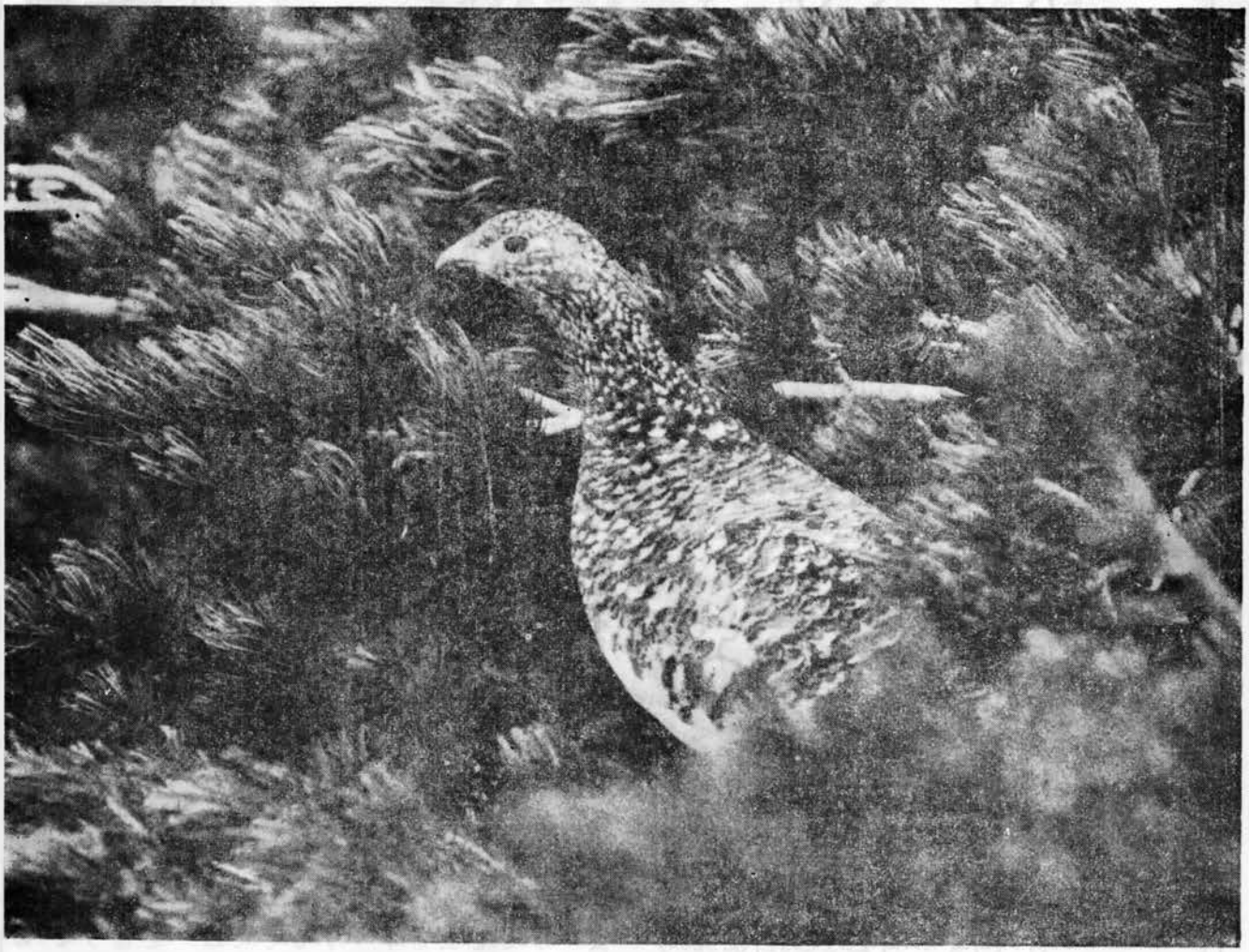
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第13巻　第7号　1968年7月25日　大町山岳博物館



夏山シーズンを迎えて思う

本格的な夏の訪れと共に、今年の山も数多くの登山者で賑わうことだろう。

そして、その登山者のひとりひとりの青春のあるいは人生の一ページに何らかの想い出が刻み込まれてゆく。

その想い出が楽しいものであって欲しいと思う。

インスタントラーメンとインスタント登山、神風タクシーと神風登山、前者は味けなく後者は危険と背中あわせ、余裕を持って、じっくりと自然の良さを味わいたいものだ。

白馬岳で登山補導員の忠告を無視して事故を起した登山者があった。言語同断。交通規則でいえば車輌不整備で事故を起したようなもの、こういうのは罰金を取る必要がある。

日曜日の早朝信濃松川駅から電話がある。餓鬼岳へ登りたいという登山者が来ているがコースを説明してやって欲しいとのこと。聞けば、雑誌で松川ルートの紹介を読んで来たという。残念ながらこのルートは手入れ不充分で後立山や表銀座を歩くように初めての登山者がそのまゝ歩く事はできない。宣伝（紹介）が先走って観光行政不在の一例。関係者の再考を願う。

大糸線の車窓に連なる北アルプスの峰々。この峰々を得意気に説明している男性登山者と感心しながら聞き入っている女性登山者。残念ながらその説明は間違いだらけである。折角のムードをこわすような野暮はすまい。せめて、国鉄さん。登山列車の増発も結構だが車窓に写るパノラマ図を窓に貼る位の小さな親切があれば旅も楽しく過せると思うが如何…

帽子に鈴なりのバッチをつけている登山者あれはどういう意味だろう？

【大町山の会会長　久保田稔】

北アルプス北部の山今昔（三）

……後立山連峯を中心として……

長沢　武

(1) 古山名について

(ハ)混同し易い同名異山(二)

レンゲ岳という名前の山については、現在針ノ木峠のそばの蓮華岳や雲の平のそばの三俣蓮華岳の他、越中、越後方面では、白馬岳のことを大蓮華山、大日岳のことを小蓮華山と今でも呼んでい、五万分の一地図にもカッコ書きして載っておりますし、富山県朝日町には今も〃大蓮華山保勝会〃が健在で、小川温泉口からの白馬岳登山コースの整備、保護に力を入れています。

第1図 天保十三年八月蓮華山并大所村絵図（部分図）
〔図中島原図〕

蓮華とは蓮花で、奥山深く白雪を戴く峯々が重畳し尖峯がひしめき合っている姿を谷間から遠望する時、あたかも開花した一大白蓮の花弁を見るようで、従って昔は幾つもの山を総称して蓮花岳と呼んでいたようです。

ところで白馬岳周辺の山を蓮花と古くから呼んでいたのは越後側で、同方面には一七二四年すでに蓮花銀山に着手した記録がっ残ておりますが（注1）それより以前、正徳五年（一七一五年）糸魚川の俳人九蚶が出した俳書「糸魚川」に蓮花銀山と題して「先白き蓮花山とも木槿とも」という一句が載っているところからみて、そうとう古くから呼ばれていたことが解ります。そして雪倉銀山関係の文政、天保（一八一八～一八四三年）の頃の絵図をみると大蓮花（現白馬岳）は三国境の山となっています。（一図参照）

ところが一方富山側では、元禄の頃から三国境の山は鑓岳ということでずっときておりましたが、文政五年（一八二二年）の「新川郡立山之御縮山之図」以降大蓮花、小蓮花なる山名が絵図に見えるようになり、現在の鑓岳を大蓮花、杓子岳を小蓮花としておりますが、これはこの頃ようやく越中方面に、越後側の三国境の山に対する呼名の知識が伝ったものゝ現地で立会いの上の確認がなかったので、このような混同によるまちがいが生まれ三国境の山違いが生んだ悲劇は以後明治末期まで続くことになるわけです。

ところで、このような誤りは他県のことばかりでなく、地元北安曇においてもおかしていました。「明治二十年以来我が長野県はその統計書において、我が郡に蓮花岳と称する高山ありて、国中第三の高峯なることを示すも、郡中の人々は平村に蓮華岳のあるを以って統計書の誤謬ならんかを疑えり、同二二年信濃教育編纂の地図に、初めて我郡の白馬岳に冠するに蓮華岳の称を以ってせしより、我が郡中の人々は驚きて、越後、越中の地誌を調査し、越後、越中の名称蓮花岳なることを知れり、然れども陸軍省白馬岳の名称に従うにより、強て他国の称を用いるを要せず。」これは明治三九年北安曇教育会編纂の「北安曇地誌」における、白馬岳に対する説明で、その経過いきさつが良く説明されています。

第2図A 元禄十三年御改 奥山御境目見連絵図（部分略図）

この他蓮華岳は一名烏帽子岳とも呼ばれ、南の烏帽子岳と混同されたり、餓鬼岳については五竜岳と餓鬼岳が、五六岳については爺ケ岳と野口五郎岳が、又天狗岳については、国境線上にある天狗岳の他、神城の犬川源頭の山である天狗岳、爺ケ岳東南の白沢天狗山などが混同して取り扱われた例などがありますが、紙面の都合で割愛致します。

(二)まぎらわしい同山異名

地域によって、また時代によって一つの山が幾つかの名前を持っていたことは第二表の通りでそれらが、実地踏査によって照合、確認がなされないまゝ、案内書や地形図が作られ発売されたので、多くの誤解や混同が生まれたことは、例を明治四二年の辻本満丸氏の文を借り、第一表で分析しながら説明した通りです。

古絵図を見る時、前項でも紹介しましたが越中、越後、信州三国境の山をめぐる富山側の大きな誤りを発見します。加賀藩では一六四八年以来「黒郵奥山廻り役」により国境警備の為の踏査が行なわれ、三国境の山は現鑓岳ということで長く来ていたのですが、文化文政時代となり雪倉銀山採鉱で、賑かな越後側の情報が入り、同方面では、三国境の山を大蓮花と呼んでいることが解り、前記文政五年の石黒信由氏の「新川郡立山之御縮山之図」において、越後で言う大蓮花は越中で言って来た鑓岳であると早のみ込みして、いまゝでの三国境の山鑓岳を大蓮花とし、しかも古くから親しまれて来た鑓岳の名前を絵図から消すにしのびず、現旭岳へ持って行って鑓岳の名前をつけ、さらにこの頃越中側でいう三国境の山上駒岳（現白馬岳）も残して三国境は大蓮花と上駒岳の中間へ持ってゆくという自信のない折衷案的方法をとったと思われるのです。

石黒氏は当時随一の近代測量技術を持って

第2図B 富山県管内図(明治18年)

いましたが、老令のため後立山連峯には登ったらしくなく、手先の者をして測量させ、その結果と当時の山廻り役から聞いた山名や絵図から判断した山名を結びつけたらしく、越後でいう大蓮花が越中でいう上駒岳であり、三国境の山であることが未だ解らずこのような結果となってしまいました。しかし氏の測量術の正確さは、その後明治末年に到るまで訂正の余地のない程立派なものであったため、山名の誤りはそのまゝ訂正されずにづっと続いて来ました。

(ホ)宙に迷う山名

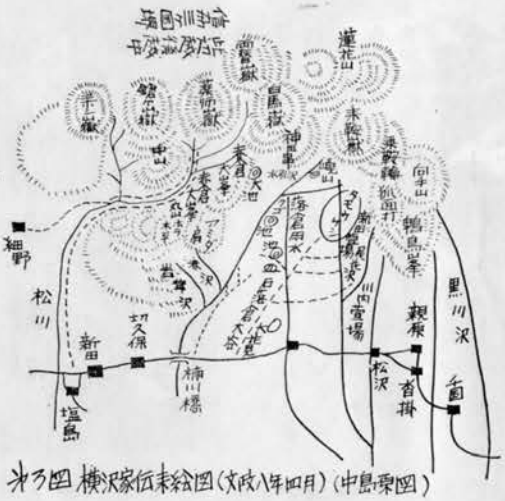
(名実不一致の古絵図と記録)

絵図は眺めて楽しいものですが、そこに載っている山名が現在のどの山をさしているかを考えると頭が痛くなるものばかりです。特に山争いなどで作った絵図は、双方自分に有利なように絵を画いてあるので、全く判断に苦労します。

鳥越ガ嶽と両替嶽

松本平唯一の集大成綜合記録書の古典「信府統記」第七巻に「他境巡廻り百首」という歌があります。この歌は読み書きのできない一般民衆のために、重要事項を歌として覚えさせ伝継させてきたのではないかと思われるものです。その安曇郡の間に次のような歌があります。

えびらより横前鞍や猶みなみ風吹の山のりくらが岳
やくし嶽鳥越が嶽猶みなみ又のりくらが嶽といふあり
鎗が嶽平川嶽や餓鬼が嶽よこ山つゞきけんのふ嶽
ごろく嶽さら〳〵越やたひら川両国さかふしなの越中



第3図 横沢家伝来絵図(文政八年四月)(中島栗図)

これは北の方から山名を読み上げ、順次南へ国境線を歌って行くもので、たいがいが現在の山に結びつくことができる山名ですが、ただ一つ〃鳥越が嶽〃なるい山名は、古今いずれの記録にも載っていない山名で、実に不思議な山名です。しかし公的書物で調査も充分したり、記録も私的な発言などを基にしたものでなく、公の立場から、役人をして聴集させたり報告させたりして作り上げた該書物ですから、でたらめなものとは思えません。私をして推測させればこの山は現白馬岳を指すのではないかと思われます。それは次に述べる両替岳が白馬岳であるとほぼ断定できるからで、鳥越えは転訛してトリケエとなりますが両替のことも俗にトリカエつまりトリケエで鳥越えは両替に通じ、さらに両替は領界つまり三国境の山に通じるからです。しかしこれはあくまでも推測であり臆測の域を脱しません。

現乗鞍岳から杓子岳までの間の山は、古くから入会山として境界や山名もはっきりしなかったようで、今の親ノ原から栂池にかけての入会山の境界をめぐり、千国村と塩島村とが享保の頃から争いを続け、幕府の役人が裁定に来たことは前記「信府統記」に克明に載っております。そしてこゝは再び文政六年から八年間も争いを続け、ようやく文政一三年に至って解決したのですが、この訴訟書類に添付の絵図(第三図参照)に両替嶽なる山がケバ法で画かれ「此の辺越後越中信州の三ケ国堺」と注書きしてある所からみて現白馬岳と思われるのですが、その隣りの現大日岳と思われる山に白馬岳なる名前がついており、判断に苦しむものです。

神明岳、コイ岳、マスガ岳

現山名が如何なる古名を持っていたかを調べ出すことはなみ大抵のことでないことは古文書や絵図を多く見る程強く感じます。と申しますのは一つとして完全な古い記録は無く、一つ〳〵が皆まち〳〵な山名を記載せ、思い〳〵の絵を画いているからですだからなるべく沢山な記録を前にして、帰納法的方法による最大公約数を引き出し、推測するより仕方がないわけです。今十指に余る資料を前にして古名を現在の後立山周辺の山にむすびつけてみますと、どうしても資料不足で現在の山に結びつけることのできない、宙に迷う山名として、神明岳、マスガ岳、コイ岳の三つの山があります。

「信濃国全図」(部分)

注1 大和国杉村万蔵、夏の間土人を使い蓮花銀山に着手したが、深山故不成功、夜逃げして賃銀不払いて地元では大損害を受く。(大所村山岸文書・寛政十二年)

注2 中島正文「黒部奥山と奥山廻り役」(5)奥山廻り役の記録と絵図、山岳三四年第一号

立山・黒部ルート貫通と観光

阿部酉与

第二の観光革命

関西電力によるクロヨンの建設計画が発表されたとき、われわれはその現実性を疑ったものだった。しかし、世紀のクロヨン工事は、りっぱに完成され、訪れる観光客たちは、トロリーバスで北アルプスの腹中を通り抜けることを、〃あたりまえ〃のことのように感じている。

科学と文明の進歩は、人間の経験による既成観念を、根底からくつがえしてしまう。

いわゆる立山ルートが、昭和四十五年夏には営業開始をすることが、現実的になってきた。クロヨンの偉大な価値に付加される、この国際的スケールのルート建設計画が発表されたときもまた、われわれは、企業としての実現性を疑ったものだった。

クロヨンの観光開放に刺激されて、大糸線沿線（北アルプス山麓）を訪れる観光客は、昨年度において百四十万人に達した。これは、実数であるから、延人員としては、実に三百万人を越えているものと思われる。立山ルートの貫通は、この地方の観光産業にとって第二の革命ともいわれる画期的な要素を内蔵している。

国鉄の試算によれば、立山ルート開業の、昭和四十五年度における大町口から扇沢への入り込み観光客は、片道七十四万人（実数）で、昭和五十年度には、百二十六万人を想定している。この数字がいかに大きいものであるかは、さきの大糸線全部の観光客と比較してみれば、よくわかるだろう。

受け入れ体制が心配

立山ルートが開業されるにあたって、いまその対策があらゆる角度から進められているたとえば、輸送、経費、運賃制度、宣伝、セールス等が、その主要な分野であるが、これらの中でいちばん心配されるのが、大町市内を中心とする宿泊基地の問題である。

このルートを経由して、大町から富山まで八十六キロメートル、遊覧標準時間を八時間とし、大都市からのアプローチを考慮した場合、宿泊基地は必然的に大町市周辺に求めざるを得ない。

黒部ダム

しかし、現時点における収容力、施設等はこの膨大な観光客の足をとめさせるには、あまりにも貧弱すぎるのである。

大町市と、その周辺地域が、昭和四十五年までに、この対策をおろそかにしておくならば、ほとんどの観光客が大町市などを素通りして、浅間や諏訪にその拠点を求めることになろう。

この苦い経験は、すでに昭和三十九年、クロヨンが開放されて以来こんにちまでに、明確に指摘されてきたはずなのに、ふたたびこの〃あやまち〃を、くり返そうとしていることを私は憂える。

これらの膨大な観光資源を持ち、観光革命が起きようとしている好機に、地元の人たちの緩漫な反応に比べて、他の観光地のほうがクロヨンや、立山ルートを大いに活用しようとする意欲がみられるのはなぜだろうか。

すばらしい計画―針ノ木自然園

最近、「自然とその保護」の問題が大きく注目されている。我が国の風土の中でも、特にすぐれた景観を持つ長野県においては、これは最も重要な課題といえよう。

いつもいうことだが、この新しい時代の要請に先駆けて、大町市がいち早く山岳博物館を創設し、いく多の困難な状況の過程の中で、こんにちまでこれを維持してきたその英知に対して私は敬意を表する。提言すれば、大町市がその美しい郷土の自然を正しく、強く現代社会に対して、具体的にアピールできるものは、山岳博物館以外には、この地域には見当らないといえる。

それは現代における日本人が守らなければならない「自然」を大町市民がその負担において守り続けてきたのだと私は考えている。

昭和三十四年に、この博物館が編集した「針ノ木岳・自然とその保護」は、立山ルートが貫通しようとしている現在において、貴重な土地利用計画資料として高く評価される。この基礎調査は、羽田健三信大助教授たちが長い間主張してきた「針ノ木自然園」建設へのステップとなるものである。

「針ノ木自然園」こそは、やがて黒部や立山へ殺到する、都会から〃のがれた〃多くの観光客に、自然の持つ真実を教え、人間と自然の融合を図ろうとする、ユートピアである。この建設への原動力は、大町山岳博物館の長い歴史の中にたくわえられた、その知識と、経験以外にないということを自覚すべきであろう。

【長野鉄道管理局市場調査室長】

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明

ライチョウ（蓮華岳にて）

撮影　斉藤忠彦

山と博物館　第13巻第7号
一九六八年　七月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL大町②〇二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円（送料共）